

年間成長量の最大ピークに達したあと、1～2年の間に認められた。また、思春期成長以後、頭・顔面部の性差が明確に発現してくるのは、13～14歳の時期であった。

V. **Bunun** 族の頭・顔面部成長の過程は、同胞 **Atayal** 族に比べ短頭性、高頭性および広顔性をより強く維持しながら形態推移する人種差の傾向が認められた。

論文審査結果の要旨

Bunun 族は台湾山胞の一部族で、台湾本島中部山岳地帯から以南に居住している少数部族である。台湾山胞に関する人類学的研究は古くより多くの研究者によって、いろんな面から検討がなされている。今回著者は **Bunun** 族の頭・顔面部について生体計測を行い、また成長変化に伴う集団内の性差や他同胞等との比較検討を行って、加齢的变化に伴う成長の形質的特徴を把握しようとした。

今回の調査対象は6歳から18歳までの男415名、女385名で、その調査結果では成長における計測値の推移あるいは指数値の推移等に新しい分類型にあてはめるなどして、極めて興味ある調査成績が示されている。また **Scammon** の発育型にあてはめ、頭・顔面部の成長パターンが、頭部の神経型の発育、顔面部の一般型の発育を示していることを報告している。

以上の結果、本論文は解剖学的に、また人類学的に極めて資するものが大であり、学位論文として価値あるものと認めた。

氏 名 (本籍)	大 森 英 昭 (福岡)
学 位 の 種 類	歯学博士
学 位 記 番 号	乙 第383号
学 位 授 与 日 付	昭和63年11月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第5条第2項該当者)
学 位 論 文 題 目	台湾タイヤル族の頭・顔面部の成長に伴う人種差と時代差の検討
論 文 審 査 委 員	(主 査) 教授 山 田 博 (副 査) 教授 嶋 村 昭 辰 (副 査) 教授 竹 原 直 道

主論文の要旨

タイヤル族の頭・顔面部ならびに身長 of 成長変化を比較検討する目的で、台湾省苗栗県泰安郷、南莊郷、新竹県五峰郷および南投県仁愛郷に居住する6歳から18歳までのタイヤル族男性562名、女性497名について、生体計測 (1979年～1986年に採取) を行ない検討した。その結果次の様な結論を得た。

I. 計測値ならびに指数値の加齢に伴う変化

身長の有意な年間増加量は、男性で6歳から16歳、女性で7歳から8歳、9歳から14歳、15歳から16歳にかけて認められた。年間増加量の最大値は、男性で14歳から15歳にかけて、女性で11歳から12歳にかけて認められ、女性が男性より3歳早く認められた。思春期発育の急増期は、男性で9歳から15歳の間、女性で9歳から12歳と考えられ、その期間は、男性より女性の方が短かった。mid-growth spurt に相当する有意な増加は、男性で6歳から8歳に、女性で7歳から8歳にかけて認められた。

頭・顔面部において、7歳時の対成人比は、頭部が90%以上を示し、顔面部が80%から88%を示した。男性の頭・顔面部の成長は、身長の思春期急増期の終わりに peak が表れ、身長の成長と深い関連を認めたが、女性では、peak の出現が不定で、身長との関連が明確に認められなかった。

指数値の加齢に伴う変化は、頭形の長頭化、高頭化、また、顔形の広顔化が認められた。

II. 性 差

身長は、8歳から女性が男性より大きくなる傾向を示し、12歳において、最大を示した。その後、男女が逆転し、性差が17歳で最大となった。頭・顔面部は、10歳から12歳にかけて、男性が女性より有意に大きい、13歳